

別府大学での学生生活について

重松知美

(大学院文学研究科文化財学専攻 平成13年度修了)

1997年に美学美術史学科に編入学してから6年間別府大学で学んだ。キャンパスの狭さでは日本でも屈指の大学だそうだが、最初のころは教室の場所が分からず、増築で迷路のような校舎を右往左往していたのを覚えている。また、大学の立地のユニークさも印象深い。道々の排水溝からも湯煙があがる様子は、さすが温泉観光の町別府と感心しつつ通学していた。大学通りを下ると上人ヶ浜から別府湾が広がり、よく晴れた日には遠くに四国が見えた。同じ九州でも山間の田舎で生まれ育った私は、これまであまり海を見たことがなく、あっても有明海の干潟くらいのもので、青々と広がる海に憧れていた。大学の校舎やアパート、電車の車窓からも海が見えるのが珍しくて、よく窓から別府湾や高崎山を眺めていた。

美学美術史学科への編入学のきっかけは、学芸員資格の取得と美術の専門的な勉強がしたかったからなのだが、美術史という学問についてそれほど知識を持っていなかった。そのため学部生の頃はとにかく授業についていこうと必死で、基礎を憶えることと単位を取ることで精一杯であったし、大学院に進学した後も研究の難しさに悪戦苦闘していた。と同時に学ぶ事の面白さに気づいたのもこの頃であった。ある時、研究発表の機会があり、準備を進める中で何度か授業中に発表させていただいた。指導の先生方や大学院生の皆さんからの指摘や助言を得て、検討し原稿を練り直すという作業の繰り返しによって、徐々に論が整理されていく事がとても面白く感じたのである。そして自身の勉強不足にも改めて気づき、もっと勉強しなくてはとも思った。これまで、受身がちな勉強のスタイルに慣れてしまい、自身で考え積極的に調査し進めて行くという当然な事に気付くのに時間がかかってしまった。エンジンのかかりの遅い学生を辛抱強く導いてくださった先生方には心より感謝している。

社会人の端くれになった今、学生時代は良かったな、と言った人の言葉の意味が少しだけ分かったような気がする。一日の生活すべてを自分の好きな事だけに費やせるのは学生時代にしか出来ない事だったのだと最近気付いた。そしてそれはとても幸運な事であり、貴重な時間であったとつくづく思う。修士論文の提出期限が近づいていた頃、予定に比べ原稿の進捗が遅れていた私は、遅れを取り戻そうと焦り随分無茶苦茶な生活サイクルを続けていた。当然すぐに睡眠不足と疲労が溜まり、頭はぼんやりするので原稿は進まず、間違いや見落としが増えてしまう。効率の悪い事を続けながら時々フラフラと大学院の研究室へ行き情報交換すると、同級生たちも同じような顔色ながらも進行状況は良かったりして、これはいかん絶対書くぞと自身に言い聞かせながら帰宅し、原稿を書いた。大袈裟な話だが、勉強していて倒れそうと思ったのはこれが初めてだった。単に睡眠不足で疲労が溜まっていただけなのだが、論文が気になって熟睡できず、また寝ぼけた顔でパソコンの前に座るという事を繰り返していた。そんな時に、気分転換に窓から海や高崎山をぼんやりと眺めていた。昼間の風景はよく目にしていたが、市街の明かりが美しい夜景や、明け方の朝焼けにほっと一息入れて、また作業を続けた。修士論文提出期限の日、どうにか無事に提出した後、同級生たちと食べたうどんの味が忘れられない。無事に終わった安心感と疲労からか、皆黙々とうどんを啜った。荒れた胃にうどんがとても美味しかった。

一つの無事に専念できた充実感は私にとって何ものにも代えがたい経験であり財産だと思っている。そういう意味で美学美術史学科や大学院での学生時代は貴重な時間であり、私自身の方向性を決めるための多くの事を得られたと思う。